

山城・蛇塚古墳をめぐる 二、三の問題

A Few Problems Surrounding the Yamashiro/Hebizuka Kofun

広瀬和雄

HIROSE Kazuo

はじめに

①研究史

②蛇塚古墳

③桂川左岸の後・終末期古墳

④嵯峨野古墳群の歴史的意義

おわりに

【論文要旨】

京都市西北部の嵯峨野地域には、古墳時代後期の前方後円墳、大型円（方）墳、群集墳がいわば3層構造になって分布している。なかでも、蛇塚古墳は日本列島でも有数の巨石墳で、横穴式石室は見瀬丸山古墳や石舞台古墳などに匹敵する大きさをもつ。ところが、その史的位置づけはかならずしも十分ではなかった。そこで横穴式石室などをもとにこの地域の古墳編年を試行し、嵯峨野古墳群の消長をあとづけてみた。

ここでは前方後円墳が5代、ついで大型円墳が2代、5世紀末ごろから7世紀前半ごろにいたるまで合計7代つづく首長墓系譜が抽出できた。それらに加えて6世紀後半ごろからは首長墓とみなしうる大型円（方）墳が単独で、あるいは群集墳の一角を占めながら築造されるが、この頃からは複数の首長が、この地を共同墓域にして古墳を造営しはじめる。さらに、おなじ頃からそれらの近辺で群集墳もつくられだす。

嵯峨野古墳群という共同墓域に結集するとともに、畿内型とよばれる共通型式の横穴式石室を採用するといった事態の背景には、葬送観念を共有することでイデオロギー的な一体感をあらわす、いいかえれば階層的な構成をみせながらも、同一の帰属意識をもった親縁的な一大政治集団を考えたいほうが理解しやすい。つまり、前方後円墳や大型円（方）墳をつくった首長層と、群集墳を築いた多数の中間層のイデオロギー的紐帯として、畿内型の横穴式石室が機能したとみなすわけだ。ここでは首長と中間層という階層性ととともに、集団的な帰属意識もつよく表出されていたのである。

そうした関係性をもった前方後円墳や円（方）墳が嵯峨野地域に営まれた歴史的背景には、この地が日本海から由良川と桂川を経由し、大和地域にいたる河川交通の拠点であった、という事態が考えられる。すなわち、5世紀末ごろから7世紀前半ごろに「もの」と人の交通を掌握していた首長層が、その結節点で政治権力のありかを<見せた>。まだそうした役割を、前方後円墳や大型円（方）墳が十分に発揮していたのである。

【キーワード】 巨石墳、畿内型横穴式石室、河川交通、山陰道、秦氏